



ライトアップされた原爆ドームは何かを訴えるようだった。

8月2・3日に市教組 NEXT！主催でヒロシマ・フィールドワーク（以下、FWと表記します）を実施し、20人の参加者がありました。1日目は原子爆弾の爆心地周辺をサイクリングで回り、2日目は広島平和記念資料館や呉市の大和ミュージアムを見学しました。今回のFWを通して、命の尊さや平和の大切さを改めて考えました。

以下に、参加者からの感想を抜粋して掲載します。
◇ 僕自身、広島出身ということもあり、平和学習には関心を持っているつもりでした。しかし、今回のフィールドワークを通して、まだまだ知らないことが数多くあると実感しました。実際に皆さんと一緒に現地を歩き、81年前の傷跡を目の当たりにすることで、教科書や写真だけでは伝わらない現実を感じることができました。

「あの日、あの時、あの場所で」、誰にどのようなことが起こり、その人たちは何を思いながら生き抜いたのか。そして、どのような願いを込めて次の世代へ平和の大切さを伝えてくださったのかを考える、非常に貴重な機会となりました。

また、「もし自分や家族、大切な人が当時の広島にいたらどうなっていただろう」「今この瞬間も、世界のどこかで同じような苦しみを味わっている人がいるのではないか」と考えると、戦争は決して過去の出来事ではなく、今を生きる私たち一人ひとりが向き合わなければならない課題であると改めて感じました。

今回学んだことを「広島で起きた歴史」として終わらせるのではなく、自分自身が平和について考え続け、子どもたちや周囲の人にも伝えていくことが大切だと思います。このフィールドワークで得た学びや感じた思いを忘れず、平和な社会を築くために自分にできることを考え、行動していきたいです。(N・T)

◇ 一日目・・・広島市内をレンタサイクルで回る。暑い中だったけれど、夏に、8月に、広島へ来ることの意味を改めて感じれた。20人で自転車に乗る変な集団になって、市民の方からの視線が熱かったが、こうやって学び合いができる仲間がいるのが嬉しい。
二日目・・・朝早くから広島平和記念資料館へ。原爆投下の時間帯に平和公園から空を見上げると色々考えさせられた。音声ガイドを聞きながら、じっくりと資料を見てまわる訪日外国人の姿が多かった。何回も見ている展示も、毎回胸にぐっと刺さるものがある。8/6の記念式典の為にテントを張っている公園を見るのは初めてで、ここが当日はいっぱいになるのか…とその迫りに驚いた。

市電に乗って広島駅へ、途中でそこからJRで呉まで向かった。瀬戸内海がキラキラ見えて、海の街を実感した。大和ミュージアムは子連れ家族が多く、親が子どもにどんな事を伝えたくてここに連れてきているんだろうと気になりながら展示を見学した。呉市内は暑すぎて、『この世界の片隅に』の聖地巡礼は満足に出来なかったのもう少し動きやすい時期にリベンジしたい。(T・A)

◇ 今回、お恥ずかしい話ですが、初めて広島を訪れました。数多くの展示やお話に触れましたが、一番心に残ったのは、被爆した方々の「家族を思う気持ち」の強さです。自分も大けがを負いながら、それでも親や子ども、兄弟姉妹を探し続けた記録を見て、「自分よりも、まず家族」という思いに胸がいっぱいになりました。

また、袋町小学校では、地下室にいた3人だけが奇跡的に助かったという話が印象に残っています。ほんの数秒、数メートルの違いで命が分かれたという事実、言葉を失いました。さらに、広島通信病院では、自らも被災しながら被爆者の治療にあたった医師や看護師の姿を知り、命を救おうとした人たちの強い使命感にも心を動かされました。

初めての8月の広島は本当に暑く、歩きながら「80年前も、この強い日差しの中だったのか」と何度も思いました。教員として、原爆の恐ろしさだけではなく、家族を思い続けた人々や命を守ろうと行動した人々の姿、一人一人に私たちと同じ人生があったことを伝え、これからも子どもたちと一緒に平和について考え続けていきたいと思っています。みなさんと共に学ばせて頂きほんとに感謝いたします。(T・T)

◇ 大和ミュージアムへ行くのは初めてでした。これまでは、戦艦大和がなぜどのように有名なのかあまり考えたことがなかったのですが、呉が軍港として発展した理由や大和が作られた背景など、歴史を知ることができました。

世界最大と言われているけど。確かに技術力としては賞賛されるものなんだけど。でもなぜその技術を結集したものが出来上がったかという、目的は相手への攻撃のためで…史上最大の大砲は何ができるのかというと、これまでにない威力での攻撃なわけ…世界最大級の測距儀は何のためのものかと言うと、より遠くの敵を正確に撃ち落とすためのもので…。この時の技術の発展のおかげで日本が進んだのも確かです。全ての歴史の上に今の日本があるのも確かです。

私は、日本のために生きてきた人のことは否定できません。戦争に関わった日本の人も原爆を作った外国の人も。ただその末路を知っている私たちは「戦争」を否定する想いを引き継ぎ、二度と同じような道を進まないようにしていかなければいけないと思いました。今回「この世界の片隅で」を観て行ったということもあり、当時の人々のくらしがあったことをより感じながら様々な資料館を巡りました。以前来たことがある施設は、2回目だからこそ落ち着いて見る事ができたとし、初めて行く施設では新しい見方ができました。何度も行く意味があるなあと思います。また、1人じゃないのでその場で感じたことを伝えて合って見方が広がったのも、とても良かったなと思います。同じものを見ても感じ方や結びつける知識が違うので、一緒に学習しに行けるというのがとてもありがたかったです。

(T・Y)



呉市のYAMATOミュージアム。

◇ 今回の広島平和フィールドワークを通して、改めて平和を学び続け、伝え続けることの大切さを実感した。私は広島で生まれ育ち、小学生の頃から平和学習や8月6日の登校日などを通して原爆や戦争について学んできた。しかし、教員という立場で改めて現地を訪れ、仲間と対話しながら学ぶことで、これまでとは異なる視点から平和について考えることができた。

一番心に残ったのは、原爆資料館で見た被爆者の遺品や証言である。一つ一つの展示には、その人が当たり前の日常を送っていたことや、大切な家族がいたことが感じられ、原爆によって一瞬でその日常が奪われた現実を改めて痛感した。広島で育った私にとって何度も訪れた場所ではあるが、今回は展示の一つ一つに込められた思いをより深く受け止めることができ、胸が締め付けられる思いだった。

また、平和とは単に戦争がない状態ではなく、一人一人の命や人権が尊重され、安心して生活できる社会を築き続けることであると改めて感じた。私は被爆地広島で育った者として、この経験や思いを自分の中だけに留めるのではなく、子どもたちへ伝えていく責任があると考えている。今後は、事実を正しく伝えるだけでなく、子どもたちが自ら考え、互いの命や平和の大切さについて話し合える授業づくりを行い、今回の学びを教育実践に生かしていきたい。(M・R)

◇ 今回初めて参加させていただきましたが、実際に広島や呉の地を歩き、その場所でしか感じることで、きかない空気や歴史の重みを肌で感じました。展示や資料から事実を学ぶだけでなく、「なぜだろう」「自分ならどう伝えるだろう」と考え続ける2日間となり、改めて現地で学ぶことの大切さを実感しました。今回学んだことを「知って終わり」にせず、学校に持ち帰り、生徒たちと平和について考え続けられるよう、日々の教育実践に生かしていきたいと思っています。そして、ぜひまた学習会に参加し、今回気付かなかったことや新たな視点を学びたいと思っています。

(S・W)

～裏面に続く～





本川小学校「平和資料館」を見学しました。

◇ 広島 FW は、今回で 2 回目の参加となりました。前回は、私自身が広島を訪れるのが初めてで、とりあえず歴史と事実を知ることによっていっぱいになっていました。その際、先輩方に 2 回目訪れてみるとまた違う視点で、得られるものがあると教えて頂き、今回も参加しました。FW へ行く前に、平和資料館にある写真展示の人物が自分の親族であるといった特集をいくつか見ました。特集の内容を思い出しながら、平和資料館の写真をじっくり観ました。被爆した当時の様子は写真で拝見できますが、この人物のその後の生涯はどのようなものであったのか、特集で見たこの方は、被爆後の人生の過ごし方であったり、家族へこの写真が自分であったということを伝えなかったり、戦争の話をしなかったりといった心境を考えながら観ていました。

また、旧広島通信病院外来棟を訪れることができました。医師や看護師、職員ももちろん被爆し怪我を負いながらも、病院へ押し寄せてくる被爆患者の手当を不眠不休で行なったと知りました。怪我の治療が済んでも、その後、患者の身体に現れた症状が何かわからない当時の状況下の中、懸命に治療法を研究し、治療を尽くされたという出来事を学び、このことも伝承しなくてはならないと思いました。

今年の 8 月 6 日の原爆の特集をあるニュース番組で見えていました。そこでは、爆心地の場所を誤認させるような報道をしておりました。誤った爆心地の場所を知る人が増えたであろうことに、悲しくなりました。今回の FW は、青年層からの参加が多く、私たちは、広島のことを知っておられる先輩方や広島出身の青年部の方からも教えて頂ける良い機会となりました。自分たちでは知らずに行かない場所を訪れ、学べることは組合ならではのと思います。青年部 NEXT では、こういう機会を増やし、仲間とともに学べる場を作りたいと思います。(O・Y)

◇ このたびの広島フィールドワークでは、大変貴重な経験をさせていただきました。私自身、小学生の頃に修学旅行で広島を訪れたことがありましたが、大人になって改めて訪れることで、当時は気づけなかった多くのことを感じ取ることができました。

自転車で市内の様々な場所を巡り、これまで訪れたことのなかった場所にも足を運ぶことができました。原爆が投下されるまで、人々がごく普通に生き生きと暮らしていたことを思うと胸が痛み、生き残った方々がその後どのような人生を歩まれたのかにも思いを巡らせました。平和記念公園の地面から出土した民家の基礎や側溝を目にした際には、当時の暮らしがまざまざと想起され、言葉では表せない衝撃を受けました。

今なお核兵器を保有する国が増え続け、世界のどこかで戦争が続いている現実を思うと、恐ろしさを感じずにはられません。今回、実際に現地を訪れ、自分自身の経験として持てたことは、今後の平和学習に活かせる大きな強みになったと感じています。

また、フィールドワークを通して組合員の皆さんと繋がりを持てたことも大きな収穫でした。夜のビアガーデンでの食事も楽しく、学びだけでなく楽しさも味わえる充実した二日間となりました。大和ミュージアムや平和記念資料館、小学校跡など、多くの場所を巡ることができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。(N・T)

◇ 広島には何回か訪れていますが、そのたびに「これについて学びたい」ということを決めて行くようにしています。今回は、子どもたちにどう伝えるか考えたい、教材を探したいと思って参加しました。

これまでの学習ツアーで、原爆の被害に関する知識は増えつつあったのですが、今回改めてまわって、「1945 年 8 月 6 日 8 時 15 分、あの一瞬、あの一発の爆弾が落ちる前には、そこに人々の日常の暮らしがあったということ」を心に刻みました。

「模型のまち」という教科書に出てくる物語文を思い出しながまわりました。「戦争の悲劇を伝えようとしている今の広島だけでなく、以前、そこにあった人々の生活にも思いを巡らせる必要があるのではないか、筆者はそれを意図して、現在と過去を行き来するような構成にしたのではないかと勝手に想像しました。

今回の経験を子どもたちに伝えながら、話し合ってみたいです。

81 年前の方々が伝えたかったことは何か、

私たちが伝えたいことは何か、

ということ。(K・Y)



◇ 人々が当時そこで生を営んでいたことに着目し参加しました。『家』とは単に、雨露をしのぐ屋根を意味するだけではないはずだ。」「(爆風は) 人々の大切な生の一部、故郷の原風景、記憶の一部を破壊するのだ。」「(岡真理) という文を思い出しながら各地を見学していました。建物の壁面の文字、身につけていた服や物などから、当時の人々の暮らしを想像しました。懸命に生きていた人々の大事にしていたもの、思い出のあるもの、暮らし、身体、そして命を奪っていく戦争の恐ろしさと酷さを感じました。暴力によって暮らしが壊されていくことはあってはならないと思いました。

大和ミュージアムでは、艦艇を造る技術が誇れるものであったことも、それが人の命を奪っていたことも、どちらも否定できないものであると思いました。前線にいた人にも家族がいて、生活があったことを考えると、どのような思いだったのだろうと思案します。

戦後まもなくから 81 年後の現在に至るまで、後世に伝えるために、モニュメントや戦争の遺構を残そうと尽力した人々がいることも実感しました。それらを受け取り、教員として、子どもたちに伝え、ともに考えていくために、今回の学びを活かしたいです。(N・A)

◇ 「この世界の片隅に」を観て、漫画を読んでから行きました。この話は、人々の戦争中の日々のくらしが主で、そしてそれがどう壊されていくのかというのが、みんなの人間らしいそれぞれの個性に親しみを感じたり、すずさんの周作さんへの恋心に共感したりもしながら観て感ずることができました。

広島では色んなところを回りながら、当時、みんな自分も苦しくて大変な中、周りの人たちを思いやって乗り越えようとしてきたことに、心を動かされました。

今の日本でもそれが出来るのかなあと考えたとき、自分もまだ何も出来ていない、熊本の人たちへの支援を考えたいと思いました。また、二度と戦争のない世界にするために、教育者として自分が出来ることをもう一度考えていきたいなあと思いました。色んな課題から目を背けて、無関心でいる方が楽だけど、そういう生き方をしないように、積極的に学ぶことを大切にしていきたいなあと考えた旅になったことに、改めて感謝します。(N・N)

◇ 一番心に残っていることは 1 日目にしたサイクリングです。今まで、原子爆弾や戦争については広島平和記念資料館や原爆ドームでその悲惨さを学んだことはありました。しかし、実際に原子爆弾が落とされた場所や被害を受けた小学校を直接訪れたことはありませんでした。被害のあった袋町小学校に行ってみると、壁一面にたくさんのチョークで大切な人の生存を確認する言葉が書き残されていることを知りました。どれだけ大切に思っている人でも見つからない状況や、我が子を必死で探す親の強い思い、そして原子爆弾がもたらした恐ろしさが、残された文字の一つひとつから直に伝わってきました。当時、先生方がどのような言葉を子どもたちにかけていたのかは分かりませんが、自分自身も被害を受けながら一生懸命子どもたちを守ろうとしていた姿を想像すると、戦争は決してあってはならないものだと思えました。

今回のサイクリングで広島のような場所を巡り、これまで知らなかった原子爆弾の真の恐ろしさを深く知ることができました。この体験で学んだことや二度と戦争を起こしてはならないという思いを自分の心にしっかりと留め、これから出会う子どもたちへ自分自身の言葉で伝えていきます。(N・T)

◇ 今回、広島を訪れて最も心に残ったことは、実際に被爆したものや、原爆に関する資料を自分の目で見たことです。これまでも原爆や戦争について学んできましたが、広島で被爆した建物や当時の人々の生活の様子、残された資料などを目の前にすると、これまで知識として知っていたことが、より現実の出来事として感じました。特に、資料館には当時の人々が実際に使っていたものや、被爆した人々の苦しみを伝える資料が数多くあり、一つ一つを見ることがとてもつらく、言葉も出ず、胸が苦しくなりました。

戦争や原爆によって生まれるものは何もなく、多くの人の命や大切な日常が奪われるだけなのだと改めて感じました。戦争を経験していない私たちにとって、当時の出来事を本当の意味で想像することは難しいです。しかし、だからこそ、実際に残されているものや、そこで起きた出来事を知り、学び続け、子どもたちに伝えていくことが大切なのだと思います。

私は小学校の教師として、今回感じたことを自分の中だけにとどめず、子どもたちにも伝えていきたいです。戦争の悲惨さだけでなく、当たり前の日常がどれほど大切なものなのか、そして平和を守るために自分たちに何ができるのかを、子どもたちと一緒に考えていきたいです。(N・M)